

## 主 題：備えなさい。キリストが来られる。②

聖書箇所：使徒の働き 20章24節

前回私たちは「備えなさい」という神様の警告を学びました。そうでなければ救いを逃してしまうからです。残念ながら多くの人たちが自分勝手な救いを信じています。例えば善行によって救いにあずかるとか、宗教を信じることによって救われるとか、ある儀式を守ることだとか、特別な体験をすることであるとか。またある人は自分がクリスチャンの家庭に生まれたからそれが自動的にその人を救いへと導くかのように思っている節があります。ですから主はこのみことばを通して、私たちが救いを逃してしまうことがないように、機会が与えられているうちにこの救いにあずかるようにと命じられたのです。そして前回見たように我々ひとりひとは自分の救いが本物かどうかを吟味しなければいけません。救われていると思いながらそうでなければ、こんな悲惨なことはありません。

さて、我々が見たみことばは、まだ救い主を信じていない者たちに対する警告のメッセージでした。同時にクリスチャンたちに対しても主は備えをなしていなさいと命じておられます。前回我々は少しそのことを見たのですが、きょう我々はこのみことばを通してそのことを学んでいきたいと思えます。なぜ我々が備えていなければならないのか——。確かにイエス様は帰ってくるということを私たちに教えてくださっています。人々はイエス・キリストの再臨を待望しながらこれまで歩いて来ました。私たちがそのために備えておかなければならない理由は、私たちにも大きな責任が主から与えられているからです。イエス・キリストを信じた私たちに与えられた責任は、この主の命令に従って生きるという責任です。パウロは、まさにそのように生きた人物です。彼は主のためにすべてを捨てて従ってまいりました。彼自身の主に対する愛を我々は見ることができます。パウロもそして多くの信仰の勇者たちもイエス様が帰って来られた時に、この地上におけるクリスチャンとしての働きの清算がなされるのだということを私たちは知っています。前回、5タラント、2タラント、1タラントを預かった者たちは自分たちの主人が帰って来ることを信じて熱心に働き、その働きが主人から評価された例えを我々は見ました。主は、あなたたちも彼らの歩みに習って歩いて行くことが必要だ、主に対して忠実に歩いて行くことが必要だと教えるのです。主イエス・キリストの救いにあずかっている、本当に救われたクリスチャンたちはみんな、主に対して忠実でありたいとする共通した願いがあります。できているか、できていないかはともかくとして、そういう新しい思いを持って私たちは歩みを始めたのです。

きょう私たちが今から見ていきたいのは、私たちの信仰のすばらしい模範であるパウロという人物の歩みです。なぜ彼の歩みを見るかというと、彼はその死を目前にした時に、2テモテ4：7で「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通し」と告白しています。言い方をかえれば、彼は私は信仰者として主に対して忠実に歩いて来た。私は後悔しない人生を生きてきた、そのようにと彼は告白をするのです。間違いなくパウロはマタイ25：21の例えにあつたように「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と主人が褒められた、その褒美が自分にも与えられることを確信していました。神の前に立った時に、パウロ自身は「よくやった」と主が褒めてくださることを確信していた。それは彼が忠実に歩んだからです。そしてそのパウロの歩みの秘訣を見ていきます。なぜなら我々もみんな主からそのように褒めていただきたいと願っているからです。でも実際の私たちの生活はさまざまな失敗の連続です。忠実でありたいと願っているがそのように生きていないのが私たちです。どうしたら私たちが最後の息を引き取る前に、「私は神の前に悔いのない人生を送った」、「走るべき道のりを走り終え」と言うことができる、そんな信仰生活を歩むことができるのかです。パウロは我々にそのことを教えてくれるのです。

まず皆さんに見ていただきたいのは、きょうのテキスト使徒20：24です。彼はこんなふうに言います。「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」、このパウロの告白が私たちに教えてくれることは、彼は主の命令に従うことだけに関心を払っていたということです。なぜかということ24節の前を見ればわかります。そこでパウロは自分はこれからエルサレムに上っていくと話しています。そして22節でどんなことが自分の身に起こるのかわからないと話した後、ただわかっていることもあると23節で言います。「聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみ私を待っていると言われることです。」、パウロがあかししたのは、聖霊なる神様が私に細かい具体的なことではないけれども、エルサレムに行けば私は大変な苦しみに遭うということを教えてくれたと。普通だったら私たちは何とかその難を逃れようとして、我々はそれを知ったら、ひょっとしたらエルサ

レムに行かないで別の道がないかと考えるかもしれない。でもパウロの関心は自分がどんな苦しみを受けるかではない。パウロは神のみこころに従っていく、神が命じておられることを守る、それにしか関心がなかったことをここで告白するのです。パウロは神を愛していました。この神が喜ばれることしか考えていなかった。

ちょうどあのダビデに仕えた3人の勇士たちのようです。彼にはすばらしい3人の勇士たちがいました。ダビデがペリシテ人と戦っている時、ペリシテはベツレヘムを包囲していました。そこにペリシテの陣があり、軍隊がいました。ダビデはぼそっと「あのベツレヘムの井戸の水を飲みたいな」と言います。そうすると、この3人の勇士たちはベツレヘムまで行って水を汲んで戻ってきます。敵陣の中を通って行かなければいけません。自分の命を大変危険にさらすことになります。でもこの3人の者たちはそこに行ってダビデが望んでいた水を汲んでやって来るのです。ダビデはそれを飲もうとはせず、それを注いで主に捧げ、2サムエル23：17で「主よ。私がこれを飲むなど、絶対にできません。いのちをかけて行った人たちの血ではありませんか。」と言っています。なぜこの3人の勇者たちは自分の命を顧みることなく、このようなことをしたのでしょうか？王であるダビデを愛していたからです。彼らはダビデが望んでいること、ダビデが求めていることを行いたかったのです。恐らく彼らの中にあっただのは、ダビデが喜んでくれるためだったら自分は命を落とすことになっても構わないと。愛ですよ。

パウロも同じようなことを言っています。神が私にエルサレムに行けと言われた。そしてそこでどんな苦難が私を待ち受けているのかもわかっている。私はそこでいのちを落とすかもしれない。でも構わない。私の願っていることはこの神が喜んでくれることだ、それしか私にはないと。こんな人生をパウロは生きたのです。神がパウロを喜ばれた理由がわかります。道理でパウロは私は後悔の全くない人生を歩んだと言うことができた。まさにここに我々がその姿を見ることが出来ます。彼は主が喜ばれること、主に喜んでいただくことだけを考えて生きていたのです。

#### ☆ パウロの人生から学ぶ、後悔のない人生の秘訣

パウロが歩んだように、私たちが最後の最後になった時に、人生を振り返って「後悔はない」、私は歩むべき歩みをしてきた、信仰を守り通したと告白できる信仰者にあなたや私が変わられていくために何が必要なのか、今から三つのことをご一緒に見てまいります。

##### A. 主の救いにあずかること

そういう後悔を残さない人生を生きるためにまず一つ目に必要なことは救いにあずかることです。パウロも24節で「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら」と言います。つまり先ほども見てきたように、パウロは神様からいただいた「任務を果たし終えること」だけを目的に生きていたということがここに記されています。パウロだけではなく、我々みんな例外なく神のみこころに従って生きようと思って生まれてきたのではない。生まれてから私たちがしてきたことは、みこころを全く無視して自分の思いどおりに生きる、罪の人生を生きてきたのです。神のみこころを全く無視して、これは私の人生だから好きに生きると私たちは神に逆らう歩みを繰り返してきたのです。そのような生き方をしている者が神に喜ばれる、後悔を残さない生き方をするためには、その人は生まれ変わらなければいけないのです。私たちがどんなに心を入れ替えても、パウロが生きたような人生を生きることはできません。パウロがこのような人生を生きたのは彼自身が救いにあずかったからです。

救いというのは神の恵みのみわざであり、救いというのはその救いに預かった者を神は根本から変えてくださる、新しく生まれ変わることです。救いというのは神があなたや私を全く新しい者へと造りかえてくださるのです。ヨハネ3：3「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることは」と言われたように新生なのです。新しく生まれ変わるのです。古いものはみな過ぎ去ってすべてが新しくなるのです。1テサロニケ1：9にあのテサロニケの教会に対して「あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようにな」ったかとあります。おわかりのように、神に逆らってきた者が神に従う者へと生まれ変わるのです。それが救いです。

では、どういう人に生まれ変わるのか、パウロが教えてくれています。2コリント5：15「キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」とあります。イエス様がなぜあなたや私のために死んでくださりこの救いを下さったか、それは私たち生きている者が「もはや自分のため」——それは救われる前の生き方です——に生きるのではなく「自分のために死んでよみがえった方のために生きる」ということです。救いにあずかった私たちはイエス・キリストのために生きる者として生まれ変わったということです。自分のために生きてきた私たちが神のために生きる者として生まれ変わったのです。これは、創造の目的に沿って生きる者として生まれ変わったのです。神はその目的を持って我々を造ったのです。すべての被造物は神に従う者としてお造りになった。なぜなら神に従うことによって、創造主に従うこ

とによって、その栄光を現すからです。でも我々はそれに逆らったのです。ですから救われることによって、新しく生まれ変わることによって、本来の目的に沿って生きる者へと私たちは変えられるのです。我々の創造主なる神に従い、この方の栄光を現す者として私たちは生まれ変わる。私たちは主に従う者として生まれ変わったのです。

ですから、福音のメッセージと言いながら、イエス・キリストを救い主と信じ、神と信じ、でも主と信じることはあなたの信仰生活において成熟した時にやればいいというメッセージが出ていますが、おかしいでしょうか？なぜなら救いというのが神に従う者として生まれ変わることなのに、それでいて神に従わないというのは矛盾していませんか？イエス・キリストは神であり、イエス・キリストは救い主であり、イエス・キリストはすべてのものの主権者です。我々の罪はこの方に従わないという選択にあったのです。我々が罪を悔い改める時に、私たちがこの主である方に従うという決心をするのは当たり前のことです。でも残念ながら聖書的でないメッセージが多くの人々を混乱させるのです。みことばが私たちに教えているのは、救いというのは私たちの努力によって得たものではなくて神から与えられたものです。そして神は私たちを新しく造り変えてくださる。本来の目的である神に従う者として私たちは新しく生まれ変わったのです。

今までは神に背いて生きてきたパウロが、神様からいただいた務めを忠実に果たすためなら、たとえその場で死んだとしても私にとっては幸いだと教えています。こういうみこころを行う人、神に従う人に生まれ変わったのだとここでパウロがあかしをしています。後悔を残さない人生を生きるためには、生まれ変わることに、救われることがまず一つ目に必要なのです。

## B. 主への感謝を失わないこと 1テモテ1:12

パウロの歩みを見た時に二つ目に必要なことは、パウロは主への感謝を失わなかったのです。1テモテ1:12を開いてください。この12節に「私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。」と書かれています。この「感謝をささげています」の「います」という動詞は現在形を使っています。パウロは、私は継続して、いつも感謝を捧げ続けていると言っているのです。

では一体パウロは何を感謝していたのかと言うと、それは13-17節に出てきます。

13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。

14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。

15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。

17 どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。

何を感謝していたのかという救いです。「罪人のかしら」、神に逆らい、神に背いている罪人の中でも最も罪深い存在が私ですと言っています。パウロは私たちと同じように、いえ我々以上に自分は救いに値しない、そのことをよくわかっていました。我々も自分自身の本当の姿が見えるたびに幻滅します。そしてどうしてこんな者に神は憐れみを示してくれるのか不思議でならない。「罪人のかしら」とパウロは言いました。そのように宣言される方はこの中にもたくさんおられるでしょう。それは神の恵みによってあなたが自分自身の本当の姿を見るからです。

パウロはいつも神に救いを感謝していた。皆さんは今朝目覚めた時に神様に救われていることを感謝しました？あなたの神に対する感謝というのは日々増し加わっていますか？ひよっとしたら感謝したと言われるかもしれない。でもそれは機械的ではなかったですか？本当に心から喜びを持って神様に救いを感謝したのか？大変難しいですよ？どうすればいいのか二つ言います。

### 1. 「感謝を妨げる罪を除くこと」

罪というのは私たちから感謝を奪っていきます。ダビデが罪を犯した時、預言者によってその罪が明らかに示されました。姦淫の罪と殺人の罪という大変大きな罪でした。彼はその罪を神の前に悔い改めるのですが、その時に詩篇51:12で「あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。」と求めます。罪は私たちから喜びを奪っていくのです。ですから神の前に罪を告白したダビデがしたことは、私の心がこの喜びであふれ続けていくようにその「喜びを、私に返し」てほしいと。神を愛して神に従いたいと願っていたダビデ、確かに大きな罪を犯したのです。でもダビデは神様に喜ばれることをしたいと願っていました。

詩篇 139 : 23 - 24 にダビデ自身の祈りが記されています。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」。ダビデは四つのことを神様に求めるのです。

### 1) 「私の心を探ってください」 23 節

まず一つ目に彼が求めたのは、私の心を探ってくださいということです。なぜ心を探ってもらいたいかというと、心が聖くないと悪いものがそこから出てくることを知っているからです。心が正しくなければ、正しくないものがそこから出てくる。だからダビデがまず求めたのは、私の心が聖くあり続けるように、そのためにどうか「私を探り、私の心を知ってください」、私の心を探してほしいと。ダビデはもし自分の心の中に正しくないものがあるならば、彼は知りたいと願ったのです。好き勝手な生活をしながら神様にそんな祈りをしたのではない。彼はありとあらゆる罪を告白しながら生きていたでしょう。ひょっとしたらそれでもと、彼は私の心を探ってくださいと願ったのです。。

### 2) 「思い煩いを知ってください」 23 節

人間というのは「思い煩い」を抱いている時に失敗を犯すからです。いろいろなことが私たちの心を騒がせます。不安に陥れます。その時に我々の目は神以外のところに向くのです。そうすると私たちは神に喜ばれないことを選択してしまう。ですからダビデはたとえ不安を覚えるようなことがあったとしても、心が騒ぐようなことがあったとしても、私が抱えている思い、考えていること、やろうとすること、それがあなたの前に正しいのかどうかを教えていただきたいと。それは彼は常に神様の前に正しい選択をしたいと願っていたからです。

### 3) 「歩みが正しいかどうかを教えてください」 24 節

「私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て」と。「傷のついた」というのは彼自身の悲しみの話ではない。これは神を悲しませることがないかどうかの話です。ダビデは自分の心の中にひょっとしたら神を悲しませているものがあるかもしれない。だとしたら、それを教えていただきたいと。

### 4) 「正しい道を歩ませてください」 24 節

そして四つ目に「私をとこしえの道に導いてください」、正しい道を歩ませてくださいと言うのです。「とこしえ」というと天国の話をしているように思うのですが、「傷のついた道」と「とこしえの道」を対比しているのです。「傷のついた道」は神を悲しませることですから、「とこしえの道」というのは神を喜ばせることです。

つまりこの告白は、神様、私はあなたが喜んでくださることを選択したい、だから教えてくださいと。このダビデの祈りを見た時に、彼がどれほど神の前に正しく生きていきたい、神の前を正しく歩んでいくことを願っていたのかを知ることができます。罪は私たちから喜びを奪うのです。我々が感謝を捧げて生きようとするならば、私たちはそれを阻止する罪から離れなければならない。このような歩みをしてきたダビデのことを神が喜んでおられたことはみことばが明らかにしています。使徒 13 : 22 「彼はわたしの心になつた者で、わたしのこころを余すところなく実行する」と。このように神がダビデのことを言われたのです。「彼」（ダビデ）は「わたし」（神）の「心になつた者」だと。「わたし」（神）の「こころを余すところなく実行する」と。この「わたしのこころ」の「こころ」ということばは神様の御意思であったり、神様の願いです。そのすべてをダビデは行っていると。わたしの願っていること、わたしが望んでいること、わたしのみこころのすべてを彼は行っていると。だから「わたしの心になつた者」だと。確かに彼は不完全でした。でも彼はこのように願って、このように生きていた。そして神はそれを喜んでおられたのです。ですから私たちも同じように罪から離れることです。

## 2. 「十字架の価値を覚える」 ガラテヤ 6 : 14、1 コリント 10 : 31、1 : 23

パウロはガラテヤ 6 : 14 の中で「私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」と言っています。彼は、私にとって一番誇りとするものはイエス様の十字架だ、これよりも誇りとするものはないと言うのです。パウロは神の栄光を現すためにすべてのことをしていた人物です。それゆえに彼は「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をすることも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」と 1 コリント 10 : 31 で語ったように、すべてのことを神様の栄光のためにしなさい、それは彼自身がそうやって生きていたからです。そのパウロが私は十字架を誇りとしていると言うのです。つまり神様の栄光を現していくためには、イエス・キリストの十字架を誇り続けることが重要だということです。パウロは自分のメッセージに関して 1 コリント 1 : 23 でこう言っています。「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。」と。彼のメッセージはそこだったのです。彼は十字架につけられたイエス・キリストを宣べ伝え続けたのです。

なぜパウロがイエス・キリストの十字架を誇り、そしてそのメッセージを語り続けたのか——。それまでのパウロは自分の人間的なものをいろいろと誇っていました。彼自身の教育や社会的な地位、当時世界を治めていたローマの市民権を持っていること、みんなが羨むようなことを彼は誇っていました。

厳格なユダヤ教徒であって、律法の行いにおいては大変熱心で、みんなが驚くような存在でした。ところがイエス・キリストの救いにあずかった途端、彼はそういったものを一切誇ることがなかった。彼が誇ったのはただ一つイエス・キリストの十字架です。なぜならば社会的地位も教育も財産も、そういったものは一切私たちに罪の赦しをもたらさないからです。パウロは十字架が自分に永遠のいのちをもたらしたことを知っています。パウロはこの十字架が自分に本当の満足と本当の幸せをもたらしたことを知っています。この十字架によって創造主なる神様との関係が修復されたことを確信しています。神との交わりが回復し、そしていつでも神の前に立つことが赦され、神と語らうことが赦された。すべてはあの十字架なのです。イエス・キリストの十字架がなければ、我々は受けるべき永遠の滅びに一步一步向かっています。何の希望もなく、我々の人生は自分のやることに何か幸せを見出すことしかなかった。でもイエス・キリストの十字架によって、この救いが可能になり、救われることによって私たちは神しか提供できない本当の幸せ、本当の満足を得たのです。だからパウロはこの十字架だけを誇ったのです。なぜなら十字架以外の何もかも私たちにそれをもたらすことがないからです。

彼は、彼が努力してこのすばらしい祝福を勝ち取ったのではないことを知っています。神の一方的な恵みによって与えられたことを彼は確信しています。パウロがイエス様の十字架を見上げた時に何を思ったのか——。恐らくその一つは自分の罪の大きさです。創造主なる神が私の身代わりとなって十字架で死ななければならないほど大きな罪を私は犯したということです。また同時にイエス様の十字架を見る時に、ここまでして私のことを愛してくださった。こんなものがほかにありますか？あなたの創造主があなたのためになしてくださったみわざ。私たちは救いの希望をそこに見出します。それだけではなく、そのことによって私たちはこんな天の祝福をいただいてこの地上を歩むことができるのです。パウロはイエス・キリストの十字架を誇っていました。十字架を誇っている人というのは、間違いなくその十字架を心から神に感謝し、そのすばらしい十字架を人々に語っている人だと思いませんか？なぜならそのことを本当に自分の誇りとしていたら、きっとそのことはいろいろなところ、会話の節々に出てくるはずですよ。だって自分が一番誇っているのでしょうか？そして私たちがこの十字架を誇る時に、その人は間違いなく神を見上げ、「感謝します、主よ」と、神をほめたたえながらその方に感謝を捧げるはずですよ。こんな私のためにあなたはこんな大きな犠牲を払ってくださったと。あの苦しみのすべては私のためであり、こんなどうしようもない私のために、あなたは何ということをしてくださったのだろうと。

そして、もし我々がパウロと同じように十字架を誇っているのであれば、我々は確実に周りの人々にこのすばらしい主イエス・キリストの偉大さを明示することになります。私たちは、我々の神のすばらしさを人々に示すために生きているのです。そのために救いにあずかったのです。神の栄光を現すということを我々は口にします。神のすばらしさを人々に示すのです。我々の神がどんなに偉大かを示すのです。ジョン・パイパーという神学者は「神はご自身の真の姿が見えるようにするために、私たちに創造し、召されました。」と言っています。なぜ神が私たちをお造りになったのか、なぜ私たちを救いへと召してくださったのか、それは神ご自身の真の姿があなたを通して見えるようになるためだと。我々信仰者が負っている責任がわかりましたか？我々はこの主のすばらしさを世の人々に明らかにするために救いにあずかったのです。そのためにこの日を神様は私たちに下さったのです。

パウロは神様に感謝を捧げていました。なぜならパウロはいつもこの十字架を覚えていたからです。主が私のために何をしてくださったのか、そしてそのことが常に彼の心にとどまり続けるために罪から離れて主のみことばに従い続けていたのです。その結果、彼は常に神を感謝し、賛美を捧げる者として歩み続けていたのです。

## C. 主の御力を信じて疑わないこと 1テモテ1：12

### 1. 主から務めをいただいた

1テモテ1：12の「なぜなら」と記されているところを見てください。「なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して」とあります。これを見た時に私たちが考えるのは、パウロのあの特別な働きに任命されたことだと思うのですが、この「務め」という単語は新約聖書の中に34回出ています。そして、この訳を見ていくと、あるところでは「奉仕」と訳されています。また食事の「配給」、誰かを助けたりする「救援」、また「仕える」と訳されています。ですからこの「務め」というのはパウロの特別な働きに限定されているのではなくて、すべての信仰者に与えられている「務め」のことです。

ペテロはこう言っています。「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」と。「それぞれが賜物を受けている」のです。つまり例外なく救いにあずかっているあなたには霊的な賜物が与えられているということをペテロは教えます（1ペテロ4：10）。11節で彼はこう言います。「語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。」と。つまりイエス様をお信じになった時に持って生まれた才能ではなくて、神が特別にあなたに賜物を与えたのです。

ローマ書の中でも、コリントの手紙の中でも、パウロはそのことについて詳細に教えています。すべての信仰者に与えられています。このみことばが言ったように「神のさまざまな恵みの良い管理者として」、つまりあなたはその賜物をいただいた者としてそれをちゃんと正しく用いる責任があるのです。あなたに与えられた「務め」を果たすことなのです。あなたはこの群れにとって、大切な大切な働き人です。なぜかと言うと、みことばがそのことを教えるからです。みんな違う賜物を持っているのです。それはみんなが必要だということです。そしてあなたがその賜物を使って主に仕え、教会に仕える時にあなたの信仰が成長するのです。同時に群れの信仰も成長するのです。絶対あってはならないことは、私はきっと神様の役に立たないからと言って何もしないことです。そのようにみことばは教えていません。そのように言っているのはサタンであり、サタンは必ず嘘をもってあなたを惑わします。みことばに立つならば私たちは神が何を教えてくださったのかわかります。あなたに賜物が与えられているのです。そしてそれをを用いるという責任があなたにあるのです。そしてあなたがそれをを用いる時に、あなた自身の信仰が、群れ全体が成長していくということです。

## 2. 主が忠実な者と認めてくださる

パウロは「務め」が与えられたという話をした後、「私を忠実な者と認めてくださった」と書いてあります。この「忠実な者」というのは「信頼できる」という意味です。「認めてくださった」というのは「考える」とか「見なす」、「評価する」、「判断する」という意味です。そうするとこの箇所は「主がパウロを忠実な者、信頼できる者と見なされた、評価なされた」ということです。

これを見た時に、恐らく皆さんは、「そりゃ、パウロだったら、神は彼を見て忠実な者と認めるよね、だってパウロだもん。」と思われるかもしれませんが、しかし、私は違う。神は私を見て忠実な者とはきっと思われぬ。なぜなら私の歩みは不忠実なことが多過ぎる。この箇所を見てそんなふうに思われる方があると思います。果たしてそれがこの聖書が教えていることかどうかです。もう一度この12節を見ると、パウロは神に感謝を捧げていました。12節の初めになぜ「私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。」と書いたのかです。私は恵みを下さった主に感謝をしている。それで十分だったかもしれない。でもパウロはそう書かずに「私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝」していると書いたのです。「強くしてくださる」ということを強調するのです。なぜかと言うと、この動詞はその人のうちに主が力を与えてくださるということです。主がその人のうちに新しい動機を与えてくださり、主がその人に霊的力を与えてくれるということです。神が力をくれるということです。

ですから、パウロが遺言として記したと言われる2テモテ4：7で「走るべき道のりを走り終え」と彼は言うのですが、17節にはこうあります。「主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。」。パウロは自分の信仰生活を回顧するのです。自分の信仰生活を振り返った時に、そこで彼がはっきりと人々の前で告白できたのは、大変苦しいこともあったし、辛いこともあったし、ルステラでは私のいのちが取られるようなこともあった。でも神はひと時たりとも私から離れることなく、いつも私とともにいてくださった。そしてこの神が私に力を与え続けてくれた。だからパウロはこうして「私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに」と言ったのです。私の主は私に日々必要な力を備えてくれる方、まずそのことを語ったのです。そして「私を忠実な者と認めてくださった」と記しています。何を言いたかったのかというと、主の務めに忠実に歩むために主イエスが必要な力を与えてくれるということです。パウロは私だからこんな歩みができたと知っているのではないのです。パウロは私も本当に罪深く弱い存在「罪人のかしら」です。でも、私は私を助けてくださる方が私とともにいてくださる、私はその方に頼って生きた結果、神が私を忠実な者と認めてくれた。つまり彼が言いたいのはあなたも忠実に歩むことができるのだ、その鍵はあなたの力ではない、あなたの知恵ではない。神なのだということを言っているのです。主に対して忠実に生きることがあなたにもできると。そのすべての鍵は力を下さる主なのです。

パウロは2コリント9：8で「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために」と言います。確かにここでは金銭的な話をしています。マケドニアのクリスチャンたちが大変な貧困の中で捧げたという話をします。ですから、すべてのことに満ち足りる、神がすべてのものを満たしてくださる。金銭的なことでもそれ以外のことでも必要を与えてくださる。それで彼は言うのです。「常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方」だと。彼が言いたいことは、すべてのよいわざにあふれるものとなるために、我々の信仰者としての歩みに必要なすべての力、恵みは、この方が少しだけではない、「あふれるばかり」に与えてくれると。だから我々信仰者が学ばなければいけないことは、私たちはこの神の力によって生きるということです。ピリピ4：13「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる」、皆さん、このみことばをご存じだと思います。問題はあなたがこのみことばを

心から信じているかどうかです。問題はあなたがこの主の力に頼って歩んでいるかどうかです。あなたの信仰は自分にできることだけをする信仰ではありませんか？神様がせよと言うことに対して、まず自分ができるかどうかを判断するのです。できないことは無理だと言うのです。神があなたに望んでおられる信仰というのはこういう信仰です。主がせよと言うことを行う信仰なのです。あなたが判断するのではない。神ができると言われたことはできるのです。そのために必要な力は備えられている。だからパウロはその力を与えてくれる神に感謝を捧げ続けたのです。

あなたが忘れてはならないことは、あなたの日々の生活は主がどのようなお方であるかを周りの人々に示しているということです。あなたのすばらしい主を人々に示すために、あなたは生きています。あなたの主がどんなにすばらしいのか、あなたは知っているはずで、神様がこの日を下さって、そしてあなたがこの日を生きてるのは、このすばらしい神様がどんなにすばらしいのかを人々の前に明らかにするためです。私たちは神様の御力がどんなにすばらしいものかを明らかにするために生きています。この力は罪から私たちを解放するのです。永遠の地獄から私たちを解放するのです。この力は私たちを生まれ変わらせるのです。この力は私たちに必要なものを備えてくれるのです。この力は私たちに本当の満足を与えるのです。この力は私たちに本当の神だけが与えることのできる幸せを与えてくれるのです。でもあなたがこの力を信頼して歩んでいないとしたら、神の力があなたを通してどうやって現れますか？私たちが気づかなければいけないのは、神があなたを通して働こうとしているのに、あなたがそれをとどめていることです。我々の信仰は、神が言われたことは必ずそうなる、そう信じるのです。あなたの判断で決めてはいけません。あなたの判断よりも、あなたの思いよりも神は遥かに優れたお方のなのです。

もしあなたが神様に信頼しておられないとしたら、どうしてあなたは神に信頼することのすばらしさを人々に伝えることができますか？もしあなたが神様という方が信頼に値するお方であるということをお伝えたいなら、あなた自身が信頼していなければどうやってそれを伝えることができますか？私たちはこの神を世に明らかにするために生きています。我々は自分を自慢するために生きていてはいません。我々の中に自慢できるものは何一つない。パウロが言ったように自慢できるのはただ一つ、我々の神なのです。この方を人々の前に明らかにするために私たちは生かされているのです。そして神はそれができるのだと言われた。なぜなら神がそれを可能にしてくださるからです。私たちのなすべき応答は、神よ、どうかあなたのみこころが私を通してなされますように、あなたのみわざが私を通してなされ、あなたのすばらしさが周りの人々に明らかにされていくために私を使ってくださいと。

### **結論：パウロの人生**

パウロの人生は救われた時から変わりました。生まれ変わったのです。神に仕える者としての新しい人生が、本来の人生が始まりました。彼はどんな時にも感謝を失うことがなかった。そして、彼はどんな時にも主の御力を信じて疑わなかった。この御力に信頼を持って生きたのです。そしてパウロはこの地上での生活を終えました。私たちのすばらしい主を人々に明らかに示す人生が終わったのです。彼の人生はただそのことだけに情熱を燃やしながらかける人生でした。何とか私のすべてを通して、この神様の偉大さが、すばらしさが示されるように、そのことだけを願いながら、そのことに情熱を燃やして生きたのです。そしてこれが神の栄光を現す人生なのです。ジョン・パイパーはこう言います。「この情熱のない人生こそ、無駄にされた人生だ。」と。何のためにあなたが生かされているのかを見てきました。この神のすばらしさを明らかにするためです。そのことをあなたは望んでおられますか？そのことを喜んでおられますか？そのことを期待していますか？そのために生きていますか？もしあなたが「もちろんです、そのことを望みながら生きています」とお答えになるなら、地上での生活が終わる時にあなたは「私は走るべき道のりを走り終えました。信仰を守り通しました」と言うだろうし、また同時に神はあなたに対して「よくやった、よい忠実なしもべだ」と言ってくださる。この神のすばらしさを世の人々にあかしするために、私たちは生きています。そのためにすべてのことを成しているのです。いま一度そのことをしっかり思い出しながら、願わくばこのパウロの模範に沿ってキリストの栄光を現しながら後悔しない人生を生きていきましょう。それが主が私たちに望んでおられることです。そして、そのような人生をあなたは歩むことができるのです。